

サンゴ細胞培養に成功

高知大など共同研究

白化解明の活用に期待

和夫名譽教授（動物発生学）が培養に協力した。

ウスエダミドリイシは熱帯や亜熱帯のサンゴ礁内に生息。成長が早く、サンゴ礁形成に重要な役割を果たしている。ただ環境の変化に敏感で、海水温の急上昇などで白化するケースが多いとされる。

研究チームはウスエダミドリイシの群体から取り出した卵と精子を実験室で受精させ、成長した幼生から分離した個々の細胞をシャーレ内で育成。初期の段階でタンパク質分解酵素を加えることで、増殖が続くことを発見した。

成長した八つのうち、七つが分裂し続け新しい細胞を形成しているという。培養した細胞株は液体窒素で凍結、解凍後も生存している。

これまで、細胞株の安定的な培養は困難とされてきたが、今回の技術により、世界中の研究機関に提供するこ

とが可能になる。

新たな研究も期待され、川村名譽教授は「環境問題の解決などの突破口になる可能性もある」と話している。

（芝野祐輔）

高知大学は13日まで、沖縄科学技術大学院大学との共同研究チームが取り組むサンゴの基礎的研究で、造礁サンゴ「ウスエダミドリイシ」の細胞株の培養に成功したと発表した。細胞株は冷凍保存可能で、白化のメカニズムの解明などに向けての活用が期待されている。

同大学院大学はサンゴの基礎的研究を進めており、高知大の川村